

## 広東語の選択疑問と中古漢語の「定」

西山, 猛  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/4275>

---

出版情報：言語文化論究. 12, pp.137-144, 2000-08-31. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 広東語の選択疑問と中古漢語の「定」

西 山 猛

### 1.

「上古漢語」<sup>1</sup>の文法体系が「中古漢語」以降にどのように継承され、また発展していったかについては、これから研究されるべき課題も数多い<sup>2</sup>。

「中古漢語」を研究してゆくにはこれまでの伝世文献の他に、まず「漢訳仏典」を研究する必要がある<sup>3</sup>。また出土資料のうちのいわゆる「実用文献」に反映された文法体系についても今後明らかにしていく必要がある<sup>4</sup>。

私がもう一つ方法論的に可能と考える方法は「中古漢語」研究に漢語方言文法研究の成果を利用するという試みである。最近では現代漢語諸方言、特にその文法について多くの研究成果が報告されている<sup>5</sup>。そういったこれまでの蓄積を生かして、中唐五代から明清までの「近代漢語」の研究において現代漢語諸方言と比較するという方法が示され、論証の慎重さに細心の注意が必要とされるものの、少しずつ確実に成果はあがっていると言ってよい<sup>6</sup>。ところがこの方法論は「中古漢語」研究においては残念ながら萌芽的段階にとどまっており、残された課題は数え切れないと言ってよい状態である。

本稿は「中古漢語」研究における方言文法研究利用の可能性を示すことがその目的であり、その試みの具体的な例として「中古漢語」の人称代名詞、接統詞と広東語との関連性について述べてみたい。

### 2.

「中古漢語」は時間の流れから見て後の書面語の規範となった「上古漢語」の次に位置することから、一般的にはどういったことがいわゆる文言から外れる「口語的表現」であるかに研究の目標が置かれてきた。その「口語的表現」が現在に至るまでどのようにつながってきたということを漢語史の観点から論じたのは王力1957—58、太田1958からである。

そういった歴史的研究は白話文献の豊富な官話であればこそ可能である。多くの方言には歴史文献が決定的に不足しており、その間の変化は推測する他はない。ただ「中古漢語」と現代方言を二つの言語として比較し、類似点や相違点を検討するということは決して無駄ではあるまい。

事実「中古漢語」の文献を現代語と比較する発想は以前からあった。例えば六朝の口語語彙研究の先駆的文献の一つに数えられる吉川1968（もと1939、1946～1948）には以下の指摘がある。

その例は先ず(1)の「寧可以急相棄耶！」（『世説新語』德行13）（どうして危急になったから

とってその男を打ち捨てられよう!)の「相」である。「相」なる助字は秦漢の文にも勿論現れる。しかしそれは「たがいに」もしくは「ともに」という意味に用いられており、双方の行為が平等である時に限るようである。しかるにこの「相」は「たがいに」でもなく、「ともに」でもない。別にはっきりした意味はないのであって、「棄」という動詞に添わって言葉に余裕を与えるだけのものである。……なおかかる「相」の用法は現代の中国語では殆ど消滅しており、僅かに「相信」、「相思」などに痕跡をとどめているだけであるが、…… (p.460)

……(3)林公云：「王敬仁是超悟人。」(『同』賞譽123)(支道林が、「王敬仁はさとり切った仁じゃ」といった。)といったような場合の「是」である。これは現在の中国語で「我は日本人」という場合の「是」と全く同じであって、「は」という程の軽い意味であり、決して「これ」というような重い意味ではない。「是」の字がこんなに軽く使われていることは、秦漢の文には殆ど見ない所である。(p.461)

ここでは「中古漢語」の基本文献である『世説新語』における口語的表現を現代北方官話と比較している。例えば秦漢の文においては「たがいに」という意味である「相」が、『世説新語』においては「相棄」(その男を打ち捨てる)というように「一方的に相手を」という現代語の「相信」、「相思」の用法に一致することを指摘しており、また秦漢の文には見られない「是」、即ち現代語に見られる系詞としての用法が『世説新語』に見られることを指摘している。

### 3.

ところでこれまで「中古漢語」文法と現代漢語方言との一致はどのように指摘されてきたであろうか。

中国語の漢語語法史研究においてたびたび指摘されてきたものとしては「中古漢語」の「其」字と広東語の「佢」(kéuih)との関連性である。例えば潘允中1982には以下のような指摘がある。

中古前期，“其”還可以用於賓格。這是過去所未見的。……“其”、“渠”聲同韻近，作代詞用，實際是同源詞。……現在廣州話仍保留着這個代詞，用於第三人稱，念[koey]；客家話的第三人稱則念[kɿ]；都是“其”的音轉，並且也是三格通用，和中古前後“其”的使用情況完全符合。(pp.83-84)

ここでは「中古漢語」の「其」は目的語としても用いられること、「其」と「渠」とが同源詞であること、広東語の第三人称[koey]と客家語の第三人称[kɿ]にその代詞が今もなお用いられることを指摘している。

また王力1989において次の指摘がある。

“渠”字應該認為是“其”字變來的。……“伊”、“渠”在六朝、唐代的時候很重要。到了宋代，由於“他”字在口語裏更普遍地應用，“伊”、“渠”已經很少見了。到了現代，除

普通話用“他”外，“伊”、“渠”仍在一些方言中使用着。上海話用“伊”（不過已由影母變爲喻母）；廣州話用“渠”（寫作“佢”、由平聲變爲上聲），客家話也用“渠”（讀成不送氣）。（pp.52-53）

ここでは六朝、唐代において用いられる第三人称「伊」、「渠」が現在においても「伊」、が上海語、「渠」が広東語、客家語において用いられることを指摘している。

ここでは実際に「其」の用例を当たって上の指摘を検証してみることにする。まず『世説新語』<sup>7</sup>における「其」の例を見ることにしよう。

（主語として）

(1) 若其欲来，吾角巾徑還烏衣。（「雅量」13）

（もし彼が来るつもりなら、私は角巾をかぶってただちに烏衣に帰るつもりだ。）

（間接目的語として）

(2) 有人遣其双鶴。（「言語」76）

（ある人が彼につがいの鶴を送った。）

（使役文の目的語として）

(3) 便使其唱理。（「文学」57）

（そこで彼に議論を始めさせた。）

『世説新語』においては「上古漢語」における限定語としての用法の他に「主語として」、「間接目的語として」、「使役文の目的語として」という新たな用法が認められた。次に同源関係にある「渠」の用例を典型的に現れる『遊仙窟』<sup>8</sup>の挿入詩の部分で見てみることにする。

（主語として）

(4) 聞渠擲入火，定是欲相燃。（p.3）

（聞くところによると彼女は詩を書いた手紙を火に投げ入れたそうですね、きっと互いに燃えたいのでしょう。）

（目的語として）

(5) 天生素面能留客，發意關情併在渠。（p.7）

（箏の生まれながらの白いおもては客人を引き止める、気を向けたり情を寄せたりはともに彼女がすること。）

（使役文の目的語として）（p.7）

(6) 眼多本自令渠愛，口少由来每被侵。

（簾の目が多いのはもともと彼をいとしく思わせたいため、口数が少ないのはいつも侵されているから。）

ではこの「其」、「渠」から発展したとされる広東語「佢」の作例を以下に挙げる。

(主語として)

(7) 如果 佢 嚟，我 就 去 嘞。

Yùhgwó kéuih làih, ngóh jauh heui laak.

(もし彼が来るなら、私は行きます。)

(間接目的語として)

(8) 我 教 佢 中文。

Ngóh gaau kéuih jùngmáhn.

(私は彼に中国語を教えます。)

(使役文の目的語として)

(9) 我 叫 佢 嚟。

Ngóh giu kéuih làih.

(私は彼を来させます。)

このように六朝、唐代の「其」、「渠」の用法がその後の広東語「佢」(kéuih)に受け継がれていることが確認されるのである。

#### 4.

ところで吉川1968にはさらに注意すべき指摘がある。以下である。

もう一つ例を挙げれば、意外の情を表す「定是」といういい方である。たとえば、(5)「……………定是二百五十沓烏標。」(『世説新語』任誕41)(……………なんと二百五十組の黒い重ね箱であった。)の「定是」である。「定」なる助字は、元来史漢の文にはあまり出現せず、また唐以後の文では専ら「さだめて～であろう」と、ある状態を想像する言葉として用いられるのであるが、ここの「定」は「さだめて」と訳しては意味が通じない。……………この「定是」は予想せざるものの出現に驚いた言葉であって、今の中国語では「敢是」という言い方に当たるものであるが、遑って秦漢の文にはこれと正しく相当るいい方を見出し難い。(p.463)

たとえば『世説新語』の「任誕」15の篇には、次のような一条がある。「……………既發，定將去。」(……………さて出発となると、思いきや連れて行ってしまった。)……………おばが初めの約束にそむき、意外にも女中を連れ去ったという意味のところに、「定將去」と「定」の字が下されている。(p.475)

たとえば、「賞譽」156の篇に、……………「卿家仲堪，定是何似人。」というのは、「おまえのところの仲堪は、けっきょくどういう人物だ。」というのであり、「品藻」34の篇に、「卿定何如裴逸民。」というのは「君と裴逸民とは、けっきょくどっちが偉い。」ということであり、(p.482)

ここでは「定」「定是」は唐以降はもっぱら「さだめて〜であろう」と意味で用いられるのに対して、『世説新語』には「なんと〜であった!」と意外の情を表す用法と「結局どういう(どちらが)〜なのか?」と疑問を呈する用法があることを指摘している。

この「定」の疑問を呈する用法に関しては、その後中国の口語語彙研究でも指摘されている。ここではその中の基本的研究文献として知られる張相1953を見てみることにする。

定，疑問辭，猶云“究竟”也。……杜甫「將曉」詩：「歸朝日簪笏，筋力定如何。」……又有不定語氣之兩事竝提時，僅加“定”字於第二事之前，而將第一事前之“定”字省去，其位置極似“抑”字者。……杜甫「第五弟豐獨在江左」詩：「聞汝依山寺，杭州定越州。」(p. 321)

張氏の指摘のように、実は疑問を呈する「定」はその後の唐詩や宋詞にも見られるのである。例えば張氏の引く杜詩の“定”の例を再確認してみよう<sup>9</sup>。

將曉二首其二 (卷14、p.1237)

(10) 歸朝日簪笏，筋力定如何。

(朝廷に帰って日々礼服を着ることになったとしても、体力はいったいどのくらい残っているだろうか。)

このように盛唐の杜甫の詩に疑問を呈する「定」の例が見られるのである。

ところで前に引いた張氏の「定」に関する記述の中に興味深い指摘がある。それは選択疑問を表す際に「定」字が用いられることである。今一度張氏の引く杜詩の“定”の例をここで再確認する。

第五弟豐獨在江左近三四載寂無消息覓使寄此二首其二 (卷17、p.1478)

(11) 聞汝依山寺，杭州定越州。

(君は山寺に身を寄せていると聞いたが、それは杭州なのかそれとも越州なのか<sup>10</sup>。)

私がこの指摘に注目したのは広東語にも同じ語彙を用いた選択疑問の形式があるからである。次の作例を見ていただきたい。

(12) 你係日本人 定係 中國人 呀?

Néih haih Yahtbúnyàhn dihng haih Jùnggwokyàhn a?

(あなたは日本人ですか、それとも中国人ですか?)

(13) 真 定 假 呀?

Jân dihng gá a?

(本当ですかそれとも嘘ですか?)

この様に広東語にも選択疑問に用いられる「定」「定係」<sup>11</sup>が存在するのである。ただし意

外の情を表したり疑問を呈したりする「定」については、私はまだ広東語をはじめとして現代漢語方言の中に用例を見いだしていない。

## 5.

今回は「中古漢語」との比較研究として広東語を用いて代名詞と接続詞の用法の類似点を指摘した。いわゆる「中古音」をもっとも規則的に反映していると言われる広東語にこのような「中古漢語」文法との類似点を見いだすことができるのは象徴的だが、今回の指摘は断片的なものにすぎず、今後もっと包括的に広東語と「中古漢語」の文法事項を見ていかなければなるまい。

また私が他の方言ではなく、広東語との関連性に注目したのは、私が広東語に触れたことがあったからというのが最大の理由である。前述のように漢語方言研究は以前に比べると最近はとてもやりやすくなったとはいえ、一人の人間で研究するには範囲が広すぎるといえる。将来的には共同研究という形でこの方法論による研究を続けていけばより精密な結果が得られるのではないかと考えている。

(2000年5月)

\* 広東語については、中国広州市在住の W さん (1963年生、女性) にインフォーマントとしてご協力いただきました。なおローマ字表記法はイェール式を用いています。

未定稿の段階で九州大学 (中国文学) の静永健先生に古典詩文に関する貴重なご教示をいただきました。記して感謝いたします。

## 注

- 漢語史における時期区分について私はいまのところおおまかに以下のように定義する。  
「太古漢語」：甲骨文、金文、『書經』等の文献に反映された言語 (殷～西周)  
「上古漢語」：『論語』、『孟子』、『左伝』、『史記』等の言語 (春秋戦国～前漢)  
「中古漢語」：『論衡』、『世説新語』、『遊仙窟』等の言語 (後漢～初盛唐)  
以上「古代漢語」  
「近代漢語」：敦煌変文、禅や儒家の語録、白話小説等の言語 (中晩唐五代～明清)  
「現代漢語」：中華民国以降の口語文献の言語
- 時期区分の目的で具体的に文法項目を設定したものに太田1988等があるが、詳細な研究はこれからの私達の課題と言える。
- 「漢訳仏典」の文法研究は例えば梅祖麟1999等にこれまでの研究成果が生かされている。日本においても玄1995、松江1999等がある。私はこういった文献はいわゆる「翻訳文体」であるので、文献の性質についてもうすこし慎重な定義をする必要があると考えている。
- 出土資料の「実用文献」とは戦国から漢代にいたる法律文書や医学書等を指す。この方面には大西氏の一連の論考がある。大西1999等を参照。こういった資料を「中古漢語」に含めるとするのは私の個人的な見解である。私は『史記』の前漢期の会話資料にも既に

「中古漢語」的要素があるのではないかとひそかに考えている。この問題についてはまた改めて論じる予定である。

5 例えば最近では『漢語方言語法類編』（黄伯榮1996）が発表され、この方面の研究を志す者にとって有益な情報を簡単に見ることができるようになった。また辞典では『漢語方言大詞典』（復旦大学・京都外国語大学1999）が揃い、音声資料として『現代漢語方言音庫～話音档』シリーズ（侯精一1994～）が完結しつつある。

6 この方面の方法論を示した論文は、例えば朱德熙1985などがその始めである。この論文では『西遊記』、『儒林外史』と江淮官話との関連性が指摘されている。以降こういった観点から書かれる論文が出てきた。

7 徐震堉著『世説新語校箋』（全2冊、中華書局、1984年）に拠る。

8 劉堅・蔣紹愚主編『近代漢語語法資料彙編（唐五代卷）』（商務印書館1990年）所収本に拠る。

9 清仇兆鰲『杜詩詳注』（全5冊、中華書局、1979年）に拠る。

10 詳注には「（明）邵（宝）注：定越州，言不在杭州，定在越州。」とあり、明代ではこの唐代の「定」の用法がわからなくなっていることがわかる。

11 多くの方言では系詞に「是」が用いられるが、広東語では系詞として「係」が用いられる。

#### 参考文献

- ・吉川幸次郎「世説新語の文章」「六朝助字小記」『吉川幸次郎全集』7、pp.454-509、1968年（もと『東方学報京都』[10-2] 1939年、『知恵』1946年11月、1947年5月、同8月、1948年3月）。
- ・張相『詩詞曲語辭匯釈』（全2冊、中華書局）1953年。（1979年第3版による）
- ・王力『漢語史稿』（全3冊、科学出版社）1957-58年。
- ・太田辰夫『中国語歴史文法』（江南書院）1958年。
- ・潘允中『漢語語法史概要』（中州書画社）1982年。
- ・朱德熙「漢語方言裏兩種反復問句」『中國語文』1、1985年。（いま『語法叢稿』[上海教育出版社] 1989年本、pp.96-113による）
- ・太田辰夫『中国語史通考』（白帝社）1988年。
- ・王力『漢語語法史』（商務印書館）1989年。
- ・玄幸子「『賢愚經』に於ける“與”の用法について」『中国文学会紀要』（関西大学）16、pp.101-119、1995年。
- ・梅祖麟「先秦兩漢的一種完成貌句式—兼論現代漢語完成貌句式的來源」『中國語文』4、pp.285-294、1999年。
- ・大西克也「試釋“是是”」『論集 中国古代の文字と文化』（汲古書院）pp.333-349、1999年。
- ・松江崇「『六度集經』『仏説義足經』における人稱代詞の複数形式」『中国語学』245、pp.11-21、1999年。
- ・侯精一企画、『現代漢語方言音庫～話音档』（上海教育出版社、カセット付き資料全40巻）



1994年～。

【吳語区】上海 蘇州 杭州 温州

【閩語区】厦門 福州 建甌 汕頭 海口 台北

【贛語区】南昌

【徽語区】歙県 屯溪

【官話区】北京 天津 濟南 青島 南京 合肥

鄭州 武漢 成都 貴陽 昆明 哈爾濱

西安 銀川 蘭州 西寧 烏魯木齊

【粵語区】広州 南寧 香港

【客家区】梅県 桃園

【湘語区】長沙 湘潭

【晋語区】太原 平遥 呼和浩特

・黄伯荣主編『漢語方言語法類編』（青島出版社）1996年。

・復旦大学・京都外国語大学合作編『漢語方言大詞典』（全5巻、中華書局）1999年。